審議会等議事概要

平成29年度　滝川市保健医療福祉推進市民会議 第４回計画策定専門部会　議事概要

日　時	平成29年11月20日（月曜日）午後6時00分～午後7時23分
開催場所	滝川市役所８階　大会議室
出席者	男澤部会長、椿坂副部会長、岸部委員、齊藤委員、泉田委員、鶴巻委員、眞島委員 （欠席：八重樫委員、宮腰委員） 事務局：國嶋保健福祉部長、黒川介護福祉課長、森健康づくり課長、土橋介護福祉課課長補佐、木村同課介護保険係長、橋本同係主査、伊藤同係主事、西尾同課介護認定係長、庄野同課高齢者福祉係長、相澤同課地域包括支援センター副所長、加地同センター介護支援係長、白石健康づくり課課長補佐、村井同課健康増進係長、澤田同課予防推進係主査
議　事	１ 開　会 ２ 部会長挨拶 男澤部会長から開会にあたって挨拶があった。 ３ 議　題 （１） 第７期計画における介護保険事業量の見込みについて 事務局から資料１に基づき説明を行った。 委　員）2025年（平成37年）に団塊の世代の皆さんが75歳以上となることから、75歳以上の方が8,359人に増える見込みとのことだが、65歳以上の高齢者の総数としてはだんだんと減少していくということか。 事務局）平成32年をピークに総数としては減少に転ずる見込みである。 委　員）要支援・要介護の認定者数の推移で、平成37年までに高齢者数は減るが、認定者数は増加するということか。 事務局）75歳以上となると急激に認定者となる割合が増加する。75歳以上の方々は増加する見込みとなっているため、64歳～74歳の方々が減少し、高齢者の総数が減少に転じたとしても、結果として認定率は増加していく見込みとなっている。 委　員）介護保険のサービスが増えてくることによって、さらに認定率が伸びるという影響はないのか。 事務局）可能性はあるが、現状として、認定は受けているがサービスを利用していないという方も全体の５分の１程度いることから、そのような影響はかなり少ないと考えている。 委　員）他市町村の認定率は滝川市と比べてどうなっているのか。

事務局）近隣市町村では、高齢化率が高いまちが多く、滝川市と比べると認定率は高いところが多い。また、全国・全道平均と比べても滝川市の方が低い状況となっている。

委　員）サービス利用者数の見込みで、老健施設の利用者数が平成30年度に増加しているのは、単純に新しい施設が整備された影響か。

事務局）そのとおりである。

委　員）高齢化が進み、認定者数が増え、サービス量が増えるという見込みであるため、そうなると、介護保険料を上げるか、利用料を上げるかということか。

事務局）利用料は医療保険の報酬と同様に国の基準で定められている。一部、総合事業の訪問・通所型サービスにおいて市町村が国基準を上回らない範囲内で一定の裁量の余地ができたところだが、国基準と同額である現行の利用料を上げることはできないことから、介護保険料の増額を抑制するためには、介護予防等を推進していくことが効果的であると考えているところである。

（２）　第７期計画の骨子について

事務局から資料２に基づき説明を行った。

委　員）高齢者の住まいの確保ということでは、公営住宅の入居率や持ち家率などを踏まえ、公営住宅をもっと増やすということや民間住宅の整備を進めるということなどはどういう状況なのか。

事務局）公営住宅の整備計画としては全体的な世帯人口が減少していくということから、今以上増加していくということにはなっていない状況である。また、滝川市は民間住宅も多く、持ち家率も高い地域となっている。

委　員）高齢者向けの公営住宅を整備していくということは、良いことも悪いこともある。例えば、高齢者しか住んでいないということではなく、若い方も住んでいて、ごみ出しなど支え合うということも必要と思う。

事務局）滝の川町の見晴団地には高齢者専用の棟があり、見晴デイサービスセンターとつながっていて、安否確認や見守りなどのサービスも付いている。

委　員）自分のところの町内会に長く住まわれていた方で、見晴団地に転居した方がいたが、亡くなった際に安否確認サービスのおかげで迅速に発見されたということがあった。

委　員）持ち家であっても、地域住民で支え合いなどできれば良いのかもしれない。

委　員）一人暮らしで付き合いを拒絶する方などいろいろな方もいることから、簡単なことではないだろうと思う。

委　員）町内会連合会連絡協議会としても昨年から見守りの取組に力を入れて進めているところである。

委　員）いきいき百歳体操教室は、男性の参加が少ないと聞いたことがあるがどういう状況か。

事務局）平成28年度の実績としては、参加者が約630人で、ボランティアの方が約130人という状況であり、うち男性の方は約１割にも満たない状況である。はじめの頃に出来た会場は男性が少ない傾向が強いが、最近は町内会が中心となり取り組んでいただいている地域などでは男性の方にボランティアとして参加していただいており、以前よりは多くの方に参加していただいているところである。

委　員）いきいき百歳体操教室は、何歳から参加できるのか。

事務局）年齢に決まりはない。平均年齢は77歳・78歳程度となっている。ボランティアの方は60歳代・70歳代の方が多く、参加者の方は60歳代から最高年齢は98歳である。

委　員）市としては会場を増やしていくということだが、この取組はボランティアの方の支えがないと難しいと思う。ボランティアの方の育成など、まだ余地があるのか。

事務局）現在、年２回定員20名程度で養成講座を行っているが、毎回20名を超える方にご参加いただいている。今後とも力を入れて実施していきたい。

委　員）いきいき百歳体操教室の参加者をまだまだ増やすということが必要だとすれば、市だけが頑張っても限界があると思う。町内会や老人クラブなどの協力が必要だろう。いきいき百歳体操教室をやる上ではボランティアの皆さんの協力も必要となる。そのような側面的な協力をいただくためにどのように組織化していくかということが第７期計画における課題であるように感じている。以前から老人クラブの活性化についても話し合われているが、意識改革ということや、ビジョンを今一度考えるということが必要なのではないかと思う。また、いきいき百歳体操教室だけでなく、例えば、パークゴルフやダンスクラブなどの様々な集まりが発展的にサロン化されれば横の幅が拡がった支え合いの活動となるのでは。

委　員）いきいき百歳体操教室の会場では、会場費などが必要となるのか。

事務局）会場を新設して２か月は市が支援するが、その後は自己負担となる。

委　員）いきいき百歳体操教室に限らず、いろいろな形でみんなが集まってやれるようなものを作るということも確かに１つの支え合いだろう。地域のみんなの顔が見えるような取組となれば一番良い。

委　員）北海道の老人クラブ連合会では老人クラブという名称が悪いから変えようということでやっているが、どれだけ名前が変わっても、最終的にその団体は何ですかとなると結局は老人クラブだと説明することとなる。

委　員）老人クラブではどのような事業をしているのか。

委　員）そのクラブによっていろいろなことをしている。人数が多いクラブはいろいろなことができるが、人数が少ないところは限られてしまう。一番少ないクラブは会員が３人しかいなくなってしまっている。

委　員）町内会連合会連絡協議会にもぜひ町内会がいきいき百歳体操教室の活動に協力していただけるようお力添えをお願いしたい。町内会の協力があれば活動をもっともっと広げることができると思う。自分の通っているところは

年１回謝恩会を開催しているが、そのときは町内会が会場費を負担してくれるなど様々なご協力をしていただけている。先ほどから言われている地域の支え合いということでは、いきいき百歳体操教室にいつも来る方がしばらく来ないとどうしたのか声掛けをし合うなど非常に支え合いにつながっている。このようないきいき百歳体操教室による活動がもっともっと広がっていけばすごく滝川にとって良いことであると考える。

委　員）町内会連合会連絡協議会としても今話し合われていることは非常に大切なことであると考えており、協力について理事の会合などで話し合いたい。いきいき百歳体操教室が地域におけるサロン的なものとなり、来ない方への声掛けなどを行うということは非常に良い取組であり、町内会連合会連絡協議会で取り組んでいる見守りの関係を含めて考えてまいりたい。例えば、以前に報告のあったアンケート結果における住民の高い参加意識ということからは、いきいき百歳体操教室などのような場を提供すれば支え合いができてくるのではないかと感じている。

委　員）一つ一つの項目ごとに何かやろうとするのではなく、今言われていたようにいろいろな取組が結果として地域の支え合いにつながっていくというようなことが大切であると感じている。先ほどの老人クラブの意識改革ということも名前を変えるということだけでなく、体質を変えていくということも必要だろう。それが第６期計画で解決していないとすれば、第７期に向けて何が必要かということも考えなければならないのでは。

委　員）介護医療院は滝川市では第７期にどこか出来てくる可能性はあるのか。

事務局）滝川市においては、若葉台病院が介護療養型医療施設であるが、まだ、今後の方向性は検討中とのことであり、第７期計画期間中には難しいと考えている。

委　員）いろいろな人の集まる場に出させていただく機会があるが、支え合いということからは、やはり人の横のつながりが大変重要であると感じている。

委　員）地域包括ケアシステムの構築ということで、知った顔を増やしていき、ネットワークを作っていくことが重要であると思うが、実際問題として大変難しい課題であると感じている。

委　員）今ある活動をお手本としていくことも大切であると思う。例えば、江部乙の駅カフェの取組や栄町のリボーンの会の取組など様々な先駆的役割を果たしている活動がある。そういったお手本の輪をどのようにして取り込んでいくかということも必要だろう。

委　員）活動場所の使用料など実際にお金がかかるということも考慮しなければならないのではないだろうか。そのお金をどう工面するのか、お金があればできることでも、実際にはお金がないためにできないということが多くあるのでは。

委　員）確かにお金の問題はあるが、良い事業であればお金は集まってくるということもあるだろうし、また、自分たちがお金を出し合ってでもやる価値のある事業でなければ長くは続かないのではないだろうか。お金をもらったが

	故に自由にできず続かなくなってしまうことも多々ある。 委　員）北海道は歴史的に官からお金をもらって開発してきたという土壌があるが、関西などでは地域自治という概念がある。地域が自らその地域に合うものを作り上げていくということであり、まさに、今話し合われている地域の支え合いということをどのようにして作り上げていくかということに通ずるのではないだろうか。地方自治体が貧乏になってきているこの時代であるからこそ、そういった考え方も必要であるように思う。 ４ その他 次回会議日程について、12月25日と決定した。 ５　閉　会
会議資料	会議次第 資料１　介護保険事業量の見込み 資料２　「第７期高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画」の骨子（案）